慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本の野球とアメリカ合衆国のベースボールの相違についての一考察
Sub Title	A study on the difference on the concept of baseball between Japan and the United States of America
Author	綿田, 博人(Watada, Hirohito)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	2003
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.42, No.1 (2003. 1) ,p.27- 36
JaLC DOI	
Abstract	An early type of baseball was thought up by Abner Doubleday in the United States of America in 1839, and it was first played in Cooperstown, New York State. Later, Alexander Cartwright invented the same diagram as we see now and thus the basic baseball style was established. Since then, baseball became popular as a town sport and spread across the country, which led to the birth of professional baseball. Especially after the Major Leagues were established, baseball has become growing popular, gaining the status of "national pastime". The baseball history in Japan began in 1873, when the game was introduced to the country by the name of "Yakyu". Before World War Two, "Yakyu" spread across the country mainly as a student sport. "Yakyu", however, is considered more as an educational tool rather than pure sport, because it is expected to contribute to build students' character. After the War, with the foundation of Japanese professional baseball leagues, it has recovered its original status as a sport. Today, "Yakyu" has gained prosperous status as the nation's sport. This study has examined the differences between the development of baseball in the U.S.A and that of "Yakyu" in Japan through historical and cultural backgrounds of both countries. It then proceed to examine the present situation of baseball in the U.S.A. and "Yakyu" in Japan both in professional and amateur team level.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00420001-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本の野球とアメリカ合衆国のベースボールの相違についての一考察

綿田　博人*

A study on the difference on the concept of baseball between Japan and the United States of America

Hirohito Watada[1)]

An early type of baseball was thought up by Abner Doubleday in the United States of America in 1839, and it was first played in Cooperstown, New York State. Later, Alexander Cartwright invented the same diagram as we see now and thus the basic baseball style was established. Since then, baseball became popular as a town sport and spread across the country, which led to the birth of professional baseball. Especially after the Major Leagues were established, baseball has become growing popular, gaining the status of "national pastime". The baseball history in Japan began in 1873, when the game was introduced to the country by the name of "Yakyu". Before World War Two, "Yakyu" spread across the country mainly as a student sport. "Yakyu", however, is considered more as an educational tool rather than pure sport, because it is expected to contribute to build students' character. After the War, with the foundation of Japanese professional baseball leagues, it has recovered its original status as a sport. Today, "Yakyu" has gained prosperous status as the nation's sport.

This study has examined the differences between the development of baseball in the U.S.A and that of "Yakyu" in Japan through historical and cultural backgrounds of both countries. It then proceed to examine the present situation of baseball in the U.S.A. and "Yakyu" in Japan both in professional and amateur team level.

Ⅰ．緒　言

日本で野球と呼ばれているベースボールの誕生は1839年とされている。イギリスで育った Rounders という遊戯がアメリカ合衆国へ渡って，その様式を改め，フィラデルフィア近辺で一般に Town Ball と呼ばれる遊戯となり遂にアブナー・ダブルデー（Abner Doubleday）がベースボールという競技を考え出したのだといわれている。発祥地はニューヨーク州のクーパースタウンである。以来，約160余年の間に様々なルール改正，組織の確立，改組によりプロフェショナルベースボールの誕生へと展開し，今日国民的娯楽とまで言われるまでに発展してきたのである。

そのベースボールが日本に輸入されたのは，明治初期のことである。その後，二つの大きな流れをもって普及発展していった。すなわち，外国人の学校教師がそこの学生にベースボールを教授し，それらの学生が卒業後，各地に赴任してベースボールを普及させた学校ベースボールと，平岡熙のようにアメリカでベースボールを習得したものが，普及させていったアマチュアクラブとの二通りである。

いずれにせよ，それは日本人が初めて接した団体競技であり，瞬く間に日本全土に席捲するほどの人気を獲得した。さらに，日本人達は，このゲームを自分たちに合ったものに変え，自分達自身のものといえるようなスタイルにまで変質させた。日本の野球の黎明期の指導者達は，このアメリカ生まれのゲームに，まず日本の武術の教養

*慶應義塾大学体育研究所助教授　1) Associate professor, Institute of Physical Education, Keio University

を持ちこんだ。つまり，際限のない鍛錬による精神の練磨を，野球における最も重要な要素と考えたのである。

日本の野球はまず最初に学生野球，つまりアマチュア野球の世界で発展を遂げたのである。これに対してアメリカのベースボールは，まず市民スポーツ（town sport）として誕生し，その後“プロフェショナル”が生まれるという経緯のなかで発展していったのである。そして数多くのプロ野球選手がアメリカ人のアイドルとしてもてはやされたのだった。それに対し，初期の段階で大学を中心とするアマチュア・スポーツとして広まった，日本の野球は，まず教育の手段として捉えられ，集団としての努力や，チームの和，さらに純粋さといったものが，何よりも重要な要素であると考えられたのである。

以上のようにベースボールと野球の歴史的背景の違いは無視することはできない。今日，日本人とアメリカ人は，同じルールブックを用いてそれぞれが野球とベースボールを楽しんでいる。1992年バルセロナオリンピックからは正式競技に採用され，世界のベースボールになりつつあり，また日米の野球交流が盛んになり，日本のプロ野球出身のメジャー選手が誕生するにまで至ってきた。そこで今回は，日米の野球の歴史をかえりみながら，両国の共通点，相違点を比較検討してみたいと思う。

Ⅱ．アメリカのベースボール

1. 野球起源委員会の報告

ベースボールの創始当時の事情については，1906年，A. G. スポルディングが主唱者となって7人の委員からなる野球起源調査委員会が設けられ，各方面から資料を収集し調査をおこなって1907年次のような結果を発表した。1. アメリカでベースボールは誕生した。2. アブナー・ダブルデーがベースボールの創始者である。3. 発祥地はニューヨーク州クーパースタウンである。しかし，アブナー・ダブルデーがクーパースタウンにいた頃のベースボールはまだ決まった統制もなく，ただ多くの人々が群がって一個のボールを取り合うだけであった。その後1839年アブナー・ダブルデーはこれを二組に分けて攻撃チームと守備チームとしてチーム11人と定めた。この当時のルールでもベースは現在と同様，3個置かれたがプレーヤーはセカンドベースマンとショートストップが各2人ずつの合計11人で編成された。バッターはボールを打つとファーストベースに向かって走り，その打球を野手が拾ってバッタースランナーに当てるとアウトになった。また打球をワンバウンドで捕球してもアウトにされた。また攻守交替は，現在と同じルールであった。このルールはかなり長く続いた。その後1845年にアレキサンダー・カートライト（Alexander Cartwright）が90フィートを一辺とする今日の正方形のダイヤモンドを考察したのである。また同年，アレキサンダー・カートライトが中心となってニューヨーク市に社交と運動の目的をもったニッカー・ボッカー・ベースボール・クラブ（Knicker bocker baseball club）が組織された。

2. 最初の野球規則

1845年以前のベースボール・ルールやプレーの方法は様々であり，統一性がなく，改良するための道を講じる必要性に迫られ，ニッカー・ボッカー・クラブはアレキサンダー・カートライトを長とする委員会を指名し，ベースボール・ルールの標準化を試みた。1846年に考案されたベースボール・ルールは以下の通りである。これはベースボール・ルールにおける最初のルールであり，以後このルールを基にして改編していくことになる。近代ベースボール発展の一歩になるものと考えられる。

基本規則14ヶ条（ガルシア，1980）

第1条　各ベースは，ホームベースから二塁，一塁から三塁までの距離を等しく42ペーセスとって設定する。（1ペースは3フィート）

第2条　試合は，21点を先に得たチームの勝ちとする。ただし，同じ回数の試合を終えることが必要である。また，同数の選手が参加すること。

第3条　ボールはピッチしなければならない。（ピッチとはアンダーハンドで投げるという意味）

第4条　ボールがファーストベース，サードベースのライン外に打たれた時は，ファウルボールとなる。

第5条　スリー・ストライク目のボールを空振りしてキャッチャーに捕球されたらアウトとなる。ただし，捕球されなかった場合は，フェアとみなされ，打者はファーストベースに走ることができる。

第6条　打球がフライで捕球された時，またはワンバウンドで捕球されるとアウトとなる。

第7条　ランナーがベースに達する前にベースにボールが保持されるかあるいはボールを身体につけられるとアウトとなる。（このルールは直ぐ後に一塁手だけは，打者が一塁に達するよりも前にボールを持って塁に触れるだけでアウトにできるように変わった）

第8条　野手がボールを捕球しようとするのをベースにまだ達していないランナーが妨害するとアアウトとなる。

第9条　三人アウトになると攻守は交替する。

第10条　バッターは打順に従ってボールを打たなければならない。

第11条　ゲームに関する総ての判定は審判員が司る。

第12条　ファウル・ストライクによって進塁あるいは得点はできない。

第13条　ピッチャーがホークを犯したときには，ランナーはアウトになることなく次のベースに進塁できる。

第14条　打たれたボールがフィールドをバウンドして超えた場合には，1つの塁が与えられる。

3.　アメリカ野球概史（ガルシア，1980，功力，1969）

アメリカのベースボールの歴史の主な事項を列記すると以下の通りになる。

①　草創期（1839年～1867年）

ベースボールが誕生し，ルールもある程度確立され，今日のベースボールの基盤が出来た時代である。そして，1857年にナショナル・アソシエーション・オブ・ベースボール・プレーヤーズ（NABP）が結成され，ベースボールを統括した。以後試合は，入場料をとって行われるようになる。また，南北戦争（1861年～1865年）の影響を受け，チーム数が減少しベースボールの発展を阻害された。しかし，その一方では戦争中に北軍の砦でベースボールが行われ，戦後南軍の兵士達が南部に帰りそれを広め，ベースボールの発展に貢献したと言う一面もうかがえる。

1845年　ニューヨーク・ニッカー・ボッカー・クラブのアレキサンダー・カードライトが規則を定め，塁間90フィート（27m43cm）として今日の野球の基礎を作る。

1846年　6月19日初めて正式な野球競技がニッカー・ボッカー対ニューヨークの間で行われた。

1857年　ニューヨークに25のアマチュアチームが集まり，最初の野球連盟を組織した（ナショナル・アソシエーション・オブ・プレーヤーズ）。21点先取すれば勝者となる規則が9回で勝負を決めることに改正された。

1863年　ヘンリー・チャドウイックが記録法（ボックス・スコア）を創案，採用した。

②　発展期（1867年～1946年）

この時期はベースボールが大いに発展し，遂にはプロフェショナルチームの誕生に至り以後アメリカンベースボールは大リーグを中心に発展していくことになる。また，技術的観点からみると前半（1867年～1920年）は投手時代である。つまり従来のピッチ（下手投げ）から現在の様なスロー（上手投げ）が許されるようになり，本塁からの距離が現在と同じ60フィート6インチ（18m44cm）になった為と言える。また，変化球の発明も大いに影響している。後半（1920年～）は打者時代であると言える。投手に様々な制限（スピットボール禁止，ボークの改正等）が作られ，また，ボール自体の改良も原因と思われる。二つの世界大戦，世界恐慌などの歴史的出来事を乗り越え，ナショナル・リーグとアメリカン・リーグを双璧に発展していくことになる。

1869年　シンシナティ・レッド・ストッキングが最初のプロチームとして組織され，現在のような膝までのズボンのユニフォームを採用した。1シーズン全勝し，プロの前途を明るくした。

1871年　最初のプロ野球連盟が9チームで組織された。

1872年　ボールの大きさと重量が現在と同じ規格になった。

1876年　現在のナショナル・リーグが8チーム，1年70試合で誕生した。

1877年　インターナショナルアソシエーションというマイナーリーグが組織され，審判員を有給とした。

1884年　投手は現在のように上手投げも許された。

1886年　打者が投手に対し，高，中，低，のストライクを要求する規則が廃止された。

1893年　投手の本塁への投球距離が現在のように18m44cm（60フィート6インチ）となる。

1901年　アメリカン・リーグがナショナル・リーグに対立した大リーグとして誕生した。

1905年　ワールド・シリーズが始る。

1914年　第3番目の大リーグと呼ばれるフェデラル・リーグが組織されたが，その後2年で解散。

1921年　権限を持った最初の野球コミッショナーとしてケネソー・マウンテン・ランディス判事が就任した。

1926年　現在使用されている中心のコルクにゴムを巻いたボールが工夫された。

1927年　ベーブルース，本塁打60本の記録樹立。

1933年　最初のオールスター・ゲームがシカゴで行われた。

1945年　チャンドラー第2代コミッショナーとなる。

③　国際化（1947年～）

人種差別の撤廃と共に，黒人選手達にも門戸が開放され，それに伴ってニグロ・リーグが消滅し，益々大リーグが繁栄していった。まさに国民的娯楽の地位を不動のものとした。1960年代に入り，両リーグは球団を増加し69年には両リーグ共12球団制となり，東西両地区制が敷かれ，東西1位によるプレー・オフを経てワールド・シリーズがおこなわれるようになった。その後90年代後半には両リーグあわせて30球団に増加しそれぞれ東部，中部，西部に分かれて，現在に至っている。球団の増加につれて，選手の補強は国内だけに止まらず中南米の選手の獲得，現在では日本，台湾，韓国のプロ野球団の選手獲得にも力を入れ，世界市場で選手補強をしている。この背景には大リーグ球団増加と選手不足も一因している。

1947年　ジャッキー・ロビンソン最初の黒人大リーグ選手となり，以後両リーグとも黒人選手を採用することになった。

1949年　二つの大リーグと59のマイナーリーグでアメリカ野球史上最大の繁栄を見た。

1958年　ニューヨーク・ジャイアンツはサンフランシスコに，ブルックリン・ドジャースはロサンジェルスに移転し，太平洋沿岸が野球の黄金海岸となる。

1961年　大リーグは両チームとも10チームとなって再組織され，1年間各チーム162試合となる。

1969年　モントリオールにフランチャイズが認められ，大リーグのカナダ進出。両リーグとも12チームになる。東西両地区制が敷かれ，プレイオフを経て，ワールドシリーズが行われることになった。

1972年　DH（指名打者）ルールがアメリカン・リーグで採用された。

ハンク・アーロンが715号本塁打を放つ。

1976年　フリー・エージェントシステムが大リーグに導入された。ハンク・アーロン755号本塁打を最後に引退。

1979年　ルー・ブロックが盗塁の大リーグ記録を塗り替える。

1995年　野茂英雄（当時近鉄球団）がロサンゼルス・ドジャースに移籍。

1998年　大リーグ計30チームになり，東部・中部・西部地区にわかれる。

2001年　イチロー，新庄剛志が日本人初の野手として大リーグ入り。

バリー・ボンズ，73号の本塁打大リーグ新記録を樹立。

Ⅲ．日本の野球

外来スポーツであるベースボールは4つの経路を通じて伝来したといえる。第1は外人教師あるいは，外人宣教師がベースボールを教授した。第2は，横浜などの在日外国人により紹介された。第3は東洋に回航されてきた船舶の乗組員によりその寄港地に伝えられた。第4は，アメリカでベースボールを行った経験のある日本人が，日本に帰国した後，紹介指導した。以上の経路を経て紹介されたベースボールは，全国に普及，発展していった。

1873年，東京神田の一ツ橋にあった東京帝国大学の前身である開成学校の外人教師ウィルソンおよび同校予備門の教師マジェットの2人のアメリカ人がベースボールを同校の学生に教えた。これが日本におけるベースボールの行われた最初といわれ，定説となっている。

1.　日本野球概史（ガルシア，1980，功力，1969，広瀬，1965）

日本野球の歴史の主な事項を列記すると以下の通りになる。

①　草創期　（1873年～1893年）

1873年に野球は渡来したが，その年は徴兵令発布や岩倉大使が欧米の視察から帰国し，征韓論が敗れて西郷隆盛が辞任し，東京新橋横浜間にはじめて鉄道が開通した翌年であり，さらに西南戦争が起こる4年前である。外国文化を積極的に採り入れようとする風潮があった当時のことであるからたちまち大流行になりベースボール熱は高まっていった。そしてクラブチームと学生チームが誕生していくのである。特に，学生チームを中心として全国に普及していくのである。また当時のルールは，日本独創的なものではなく，当時アメリカで使われていたルールを適用して試合が行われていた。

1873年　野球技日本に渡来する。

1877年　野球普及の開祖平岡熙帰朝，新橋クラブの時代を作る。

1885年　青山英和学校，明治学院，慶應義塾などがチームを結成した。

1888年　第一高等中学校がチームを編成した。

1890年　第一高等中学校覇者となり，1903年までつづく一高時代の基礎をつくる。

②　一高・早慶期（1894年～1913年）

1904年までの前半期は第一高等中学校の黄金時代が続き，後半期は早慶が第一高等学校を破り，頭角を現わしてきた。そして日本の学生野球界をリードしていくこと

になる。特に，注目すべき点は早稲田大学の米国遠征である。アメリカの科学的野球を日本に取り入れ，紹介したことは，日本野球界にとっては非常に大きな革命をもたらしたものであったと言える。これ以後より緻密な野球へと発展していくのである。またこの時代は日清，日露の二つの戦争が勃発し，富国強兵論を国家が打ち出し，帝国主義国家への基礎を作り上げ大陸進出の足掛かりとなった。

1896年　一高，横浜外人チームを破り，日本人の自尊心を高め，素手の野球から用具を使用することとなる。中等学校の試合が始められ，普及の傾向に向かう。

1903年　第1回早慶戦が三田綱町球場において行われた。

1904年　早稲田大学と慶應義塾大学が相次いで第一高等学校を破り早慶時代となる。

1905年　早稲田大学渡米，その野球土産は日本の独学野球にベースボールの長所を加えることとなった。用具に関してはグラブの使用，スパイクシューズの着用であり，また戦術的には，スクイズプレーの導入，スライディング技術の紹介，投手のワインド・アップなどが挙げられる。

1906年　早慶試合中止となる。両校応援団の喧騒が原因。慶應側（鎌田栄吉塾長）から早稲田側（安部磯雄野球部長）へ中止の申し入れ。以後1925年まで復活せず。

1907年　最初の外国チーム招待と入場料徴収，外国の招待は以後毎年恒例となる。

③　学生野球隆盛期（1914年～1935年）

大学野球にリーグが結成され，大学リーグ中心時代を迎える。1914年に早慶明の三大学リーグが結成され，1925年には早慶戦復活，東京六大学リーグ成立し大学野球隆盛期を迎える。一方では全国中等優勝大会が開催され，今日では全国高等学校野球選手権大会として，国民的行事にまで発展し，受け継がれている。また，全国都市対抗野球も始まり，社会人にまで野球が普及し，発展していった。これにはラジオ中継が始まったことも影響している。

1914年　早慶明三大学リーグ結成。

1915年　全国中等学校優勝大会開催される。

1924年　甲子園野球場新設，新式のコンクリート建築野球場の最初である。

1925年　早慶試合復活。東京大学を交えて，早，慶，明，法，立，東，の東京六大学リーグが結成される。

1926年　明治神宮外苑や球場建設される。

1927年　全国都市対抗野球大会開始，ラジオ中継始る。

1930年　大学選抜チーム，極東大会で圧倒的優勝，前回の慶應に引き続き日本野球の躍進的進歩を示す。

1932年　文部省の野球統制に関する訓令により，学校野球は統制されることとなった。

中等野球界が盛んに成り過ぎ，アマチュアリズムが崩れることを懸念し文部省が軌道修正をする為に制定。

1935年　プロ野球チーム，大日本東京野球クラブ（現在の読売ジャイアンツ）結成される。

④　プロ野球誕生期（1936年～1956年）

戦前に誕生したプロ野球，そしてそれ以前から組織化されていた学生野球は第二次世界大戦の影響を受け，敵国スポーツとして見なされ，それぞれのチームは活動中止または解散に追い込まれたが，戦後 GHQ の強力なバックアップを受け，急速な勢いで復活し，それ以後はプロ野球，大学野球，高校野球，社会人野球それぞれ人気を博していくのである。

1936年　7チームにより日本プロ野球連盟組織される。

1944年　日本野球報国会と改称したプロ野球も選手不足となり休止を声明した。

1945年　野球復活する。連合軍総司令官マッカーサー元帥・マーカット少尉（GHQ 経済科学局長）の2人は野球の良き理解者であり，GHQ あげての野球復活への全力のバックアップであった。軍国主義から民主主義の浸透に一役を担う。戦後初の試合は神宮球場（当時はステート・サイド・パーク）で11月に行われた全早慶戦である。

1946年　再編成のプロ野球は8チームで試合をはじめ，学生野球も復活した。

1948年　プロ野球人気高まり大規模な公式試合の地方進出を試みたので熱狂は全国的となる。

1948年　サンフランシスコ・シールズ来日。プロ野球はシーズンを終わってセントラルとパシッフィックの二リーグに分裂して新しい時代にはいった。

1951年　コミッショナーに福井盛太前検事総長就任，オールスター・ゲームはじまる。

1953年　テレビ放送開始される。

1954年　アジア野球選手権大会開始される。

1955年　ニューヨーク・ヤンキース来日する。

⑤　プロ野球隆盛期（1956年～）

社会経済は高度成長時代に入り，それにつれてプロ野球の人気は益々高まり，数多くの名選手を輩出し，日本の野球のリーダー的存在としての役を担うことになり，また，国際交流も盛んになって日米の野球技術の差も徐々

に狭まってきた。1990年代に入ると大リーグに挑戦する選手が名乗りをあげ，現在10人余りの日本人選手が大リーグでプレーをしているのが現状である。しかし，その一方で大学野球と社会人野球の人気が徐々に薄れ始めていることも現状である。

1956年　ブルックリン・ドジャース来日する。

1957年　熊谷組第3回ノンプロ世界選手権大会に優勝した。

1958年　西鉄日本選手権に3連勝。セントルイス・カージナルス来日する。立教大学前年に引き続き六大学リーグに4連勝した。

1959年　野球体育博物館設立。プロ野球初の天覧試合（巨人阪神戦，後楽園）。
天皇陛下が初めてプロ野球を観戦

1960年　サンフランシスコ・ジャイアンツ来日する。

1961年　作新学院，高校野球史上初の春夏連続優勝達成。デトロイト・タイガース来日する。

1966年　メキシコ・タイガース来日する。ロスアンジェンルス・ドジャース来日する。

1968年　読売ジャイアンツ史上初4連覇達成。

1969年　プロ野球生みの父正力松太郎死去。

1973年　読売ジャイアンツ9連覇達成。

1977年　王貞治756号本塁打を打ち，ハンク・アーロンの記録を抜く。

1978年　松本稔（前橋高）が，春・夏の全国大会を通じて初の完全試合を達成する。

1979年　箕島高史上3度目の春・夏連覇を達成する。プロ野球界は江川問題で揺れる。

1984年　ロサンジェルスオリンピックで公開競技となる。金メダルを獲得する。

1988年　ソウルオリンピックで銀メダルを獲得する。

1992年　バルセロナオリンピックから正式競技になる。銅メダルを獲得する。

1996年　アトランタオリンピックで銀メダルを獲得する。

2000年　プロ・アマ混成チームでシドニーオリンピックに望んだが，メダル獲得成らず。

Ⅳ．アメリカの現状

1．アマチュア・チームの現状（綿田，1989）

アメリカ合衆国のカレッジベースボールチームは1年間を3つに分けてスケジュールを作成している。FALL-SEASON，REGULAR-SEASON，OFF-SEASONの3つである。

① FALL-SEASON

FALL-SEASONの期間は毎年10月の第一週の月曜日から7週間である。この期間におけるそれぞれのチームの大目標は，チームの編成にあり，いわゆる練習期間である。そして先シーズンからチームに所属している，リターンプレーヤー（RETURN PLAYER），新しく入ってきたプレーヤーすべて同一条件にして，そこで互いに競争させ，チームのレベルアップを図り，その結果最終的にプレーヤーを30～35人に絞るのである。これを“TRY-OUT”と言うのである。この選抜にもれたプレーヤーは，向こう1年間自分でトレーニング，練習を積み，翌年TRY-OUTに再チャレンジするか，または，他校に転校して，新天地でプレーを続けるか二者択一を迫られるのである。また選ばれたプレーヤーは，来るシーズンの戦力として登録され，先シーズンの反省を再確認し，今シーズンの目標，方針等をコーチに伝えられ，それらを練習を通じて習得していくのである。

練習に関しては，非常に個人練習（INDIVIDUAL-SKILL）が多いことが特徴の1つであると思われる。その内容は基本的なプレーの反復である。各コーチが個別に基本動作を教え，それができるまで，繰り返し，繰り返し，根気良く練習させる。そしてその成果を実践で発揮させることになる。またウェートトレーニングに関しては，日本の選手の多くがおこなっているように，全ての練習後の補強的に行うのではなく，練習前に約1時間半の時間をかけて入念に行われる。そこのプログラムはウェートトレーニングの専門家が作成にあたり，また指導する。この件に関してはベースボールコーチはいっさい口をだすことは許されない。これも合衆国の専門性を非常に重んじるという特徴の1つであると思われる。練習時間はウェートトレーニング，INDIVIDUAL-SKILL，OFFENCE，DEFENCEの練習を含めて，約3時間から3時間半である。しかし，プレーヤーは，この決められた練習以外に個人で自主的に鍛錬し，自分の能力のレベルアップを図る。このことはあくまでもプレーヤー側からの要望であり，決してコーチ側からの強制的なものではない。この点はわが国の練習姿勢と比較してみると，全く反対の意識であると思われる。つまり他人から強制されている練習と，自ら進んでやる練習の違いである。

また，アメリカ合衆国のカレッジチームの特徴は，それぞれのチームが非常に個性的で，独自のチームカラーを持っているということである。これは，OFFENCE,

DEFENNCE，戦法，走塁等すべての点において現れている。このことは期間中プレーヤーとコーチのコミニュケーションが密であり，お互いにチームの方針，目標等を認識し納得しているからであると思われる。

② REGULAR-SEASON

前述の“TRY-OUT”で選抜された30から32名のプレーヤーで1月の第1週の月曜日から練習が再開され，体つくり，実戦に即した練習を繰り返し，最後の調整を行い，トップコンディションで REGULAR-SEASON に臨むのである。Official Game は2月から全米各地で展開され，5月末まで60試合（Division 3 の場合は50試合）を消化する。試合のスケジュールの組み方は，授業に支障のないようにウイークエンドの3日間を利用して3連戦システムを採用している。そしてそのほかに，ウイークデイの1日を試合にあてる。これは，授業との関連上，Night-Game の場合が多い。球場はそれぞれの大学の Baseball-Field を使用する。同一地区リーグの対戦は，Home で3試合，Visitor で3試合，計6試合行うが，対戦日程はシーズン前半と後半に分かれて組み込まれている。このことは，お互いのチームの戦力分析ができるため，また後半においては各チームの順位が大体つかめるために，かなり白熱化した試合が行われることが多い。またユニフォームは，わが国のプロフェショナルチームと同様で，Home（white）と Visitor（Gray）の2種類揃えている。各チームの順位は勝率で争われることになる。そして同一地区リーグの勝率と全試合の勝率と2本立てになっている点は非常に興味を示すことである。そして各リーグの代表が6月に全米選手権に出場し，カレッジチャンピオンを目指すことになる。

日本と比較すると試合数が圧倒的に多く，同一地区リーグだけの試合数を比較しても，アメリカ合衆国は30試合近くも対戦するが，日本の場合は，約半分である。このような状況から判断しても，必然的にリーグ戦の戦い方，選手の起用法，または試合の戦法なども違ってくるのである。アメリカ合衆国の場合，プレーヤーは Game で鍛えられ，そして上達していくのである。また，コーチに対する評価にしても，必ずしも一致はしていない。チームの成績を上げることは，重要な使命であるが，そのほかに，どのような方法でプレーヤーを養成しているかという指導法も，かなり重要な役割の1つである。従って，コーチは，プレーヤーを絶対に酷使しない。常にベストコンディションであるプレーヤーを試合に起用し，好結果を期待する。このことは，投手の起用法でよく表れている。必ずコーチは，先発投手陣を数人作り，ローテーションをしっかりと確立させ，連投をさせることは，まずありえない。そして試合に勝ちぬいていくのである。最後に忘れてはいけないことは，各チームには，トレーナーがいて選手の健康面の管理に置いてはコーチ同様に強い権限を持っているという事である。トレーナーの許可がなければ，ゲームには出場することはできないのである。日本にもトレーナーのいるチームも最近徐々に増えてきてはいるが，まだここまでの権限は持っていないのが実情である。アメリカではトレーナーの地位がしっかりと確立されているが，日本ではまだ認識されていないのである。

また，ハイスクールベースボールの場合でも1シーズン制を取り入れている。シーズンは，2月から6月であり，その間40試合の公式戦を消化する。夏の間は，その他のスポーツを行なう者，またベースボールアカデミーや地域の別のリーグに所属する者もあり様々である。しかし，チームとしてまとまって練習することは，許されていないのが現状である。

2. プロフェショナル・チームの現状

現在アメリカには，30球団があり，それぞれがナショナル・リーグ，アメリカン・リーグに所属している。各球団の組織はメジャーリーグの下にマイナーリーグを所有している。マイナーリーグは，3A，2A，1A，ルーキーリーグに分けられ，それぞれのクラスで公式戦を戦うのである。その他に独立リーグという組織があり，どのリーグにも属さずそのリーグで試合を行っている。その実力は大体2Aクラスである。メジャーリーグのスプリング・キャンプは，アリゾナ州とフロリダ州から始る。フロリダ州20球団，アリゾナ州に10球団である。キャンプインはバッテリーと野手では多少ずれている。バッテリーは2月の15日前後で野手は2月の20日くらいである。マイナーは2月の初旬からキャンプを張る。メジャーのキャンプに参加できる投手陣の人数は25～30名，野手陣が30名で総勢約60名である。その中で15名くらいは招待選手と呼ばれ，メジャーとマイナーのボーダーラインの選手である。最終的に40名の選手がロースターに掲載されその中からさらに選抜され，メジャーのベンチ入り25名（故障者リスト選手を除く）を目指してトレーニングに励むのである。

キャンプの練習内容は，時間は約3時間程度で，基本の反復練習とコンビネーションプレー等の確認が最大の目的である。調整方法は，レギュラーはオープン戦を行

いながら徐々に調子を上げてくるが，ボーダーラインの選手は初期の段階からベストに近い体調で参加し，40名の枠に残るために必死になってアピールしている。オープン戦は3月からスタートし，約30ゲーム行われる。

レギュラークラスの投手陣は，初期の段階では2～3イニングス程度であり，レギュラークラスの野手陣は5イニングスあるいは，3打席程度であり，徐々に投球回数，打席数を増加していくのである。

ボーダーラインの選手は，数少ないチャンスをものにしてアピールしようとプレーに集中し，全力でプレーをしている。公式戦が始ると過密なスケジュールが選手たちを待っている。4月の初旬にスタートし，10月初旬に終了する。この間に165試合を消化することになる。したがって連戦も数多く組み込まれていてその数は日本の比ではない。強行日程とともに選手に一番こたえるのは広大な国土とそれにともなう時差である。アメリカ大陸東西の距離が約4,500キロあり，この中に4つの異なる時間帯がある。

10月の中旬にかけてワールドシリーズが行われる。94年から東西中3地区制度になり，4チームがポストシーズン・ゲームに出場可能になった。3地区の各1位チームと3地区の2位のうち最も勝率の高いチーム（ワイルドカード）が出場できる。まず，「地区優勝の最高勝率チーム対ワールドカード」「地区優勝の勝率2位チーム対地区優勝の勝率3位チーム」の対戦で5回戦制にて行われる。次に，この勝者同士がリーグ優勝を目指して7回戦制で対決，このリーグ優勝者のみが，ワールドシリーズへ出場できる。ワールドシリーズは，7回戦制で行われる。従ってワールドチャンピオンが決まるのは，レキュラーシーズン終了から約一ヵ月後ということになる。シーズンが終わり，12月上旬にウインターミーティングが開かれる。この会議にはコミッショナーをはじめ各球団のオーナー，GM，監督，コーチ，スカウト，それ以外にマイナー・リーグの首脳も出席する。会議の主な内容はトレードの交渉である。

しかし国民的娯楽であるメジャーリーグは現在大きな問題を抱えている。それは選手の年棒高騰と球団経営悪化ということである。これは，フリーエージェント制導入によって生じた問題であるといっても過言ではない。大リーグ機構は，この危機に対して年棒抑制と球団削減という案を選手会に提示し，解決しようと模索しているのが現状であり，この結末は今後のメジャーリーグの発展を左右するものと考えられる。

V．日本の現状

1. アマチュア・チームの現状

① 大学野球の場合

春，秋の2シーズン制を採用しており，春のシーズンは4月，秋のシーズンは9月にそれぞれ開幕する。各シーズンとも約二ヶ月である。ほとんどの地区の連盟はリーグ戦形式，勝ち点制を採用していて，同一校対戦で2勝したチームが勝ち点を得ることが出来る。各地区の優勝チームが春は6月に開催される全日本学生選手権に出場し，覇権を争うことになる。この大会は，トーナメントで争われる。秋は明治神宮大会と称して11月に開催される。各リーグは大体6校から編成されていて，10試合から15試合程度でリーグチャンピョンが決まってしまうことになる。アメリカと比較してみると圧倒的に試合が少ないのが現状である。オフシーズンというはっきりとしたものはなく，1年を通して野球に接している。また7，8月はリーグ戦はなく，春のシーズンの結果を顧みながら，チームを立て直し練習と練習試合を繰り返しながら，戦力を整え秋のシーズンに備えるのである。各チームの実情は様々であり，100人を超えるチームがあると思えば，30人前後のチームもあるといった状況である。いずれにせよ，試合で技術を磨くというよりも練習で体力を鍛えるという傾向が強い。今後，大学野球が今まで以上に発展していく為には，他のリーグとの交流試合を含め公式試合数を増やし，より高いレベルでのチャンピョンシップを争っていくべきであると思う。

② 高校野球の場合

夏の全国高等学校選手権大会，春の選抜高等学校選手権大会と2つの全国大会がある。それらに出場するために各地区で予選大会を開催しているが，すべてトーナメント形式で行われているため，1つも負けられない条件下でどうしても勝利が優先してしまう傾向が強く，時には選手を酷使する場合がある。大学野球と同様に一年中野球に浸り，鍛えることが常に優先してしまう傾向が強い。スポーツ本来の目的の一つであるエンジョイするという事を考え，また育成して長所を伸ばすことも必要である。また人間にとって，最も重要な成長期にあたる時期に1つのスポーツのみに没頭するのは決して良いとは思われない。また試合に勝つ為に選手を酷使する面があり，怪我をしたり，故障したりして，時には選手生命を断念する場合もある。これらの主なる原因は，年間を通しての過密スケジュールとトーナメント方式の弊害であ

ると言わざるを得ない。選手達の体力，体調等を考え年二回の選手権大会開催の再考と夏の炎天下の試合開催も一考の余地があると思う。

2. プロフェショナルチームの現状

日本の場合は，12球団あり，それぞれセントラル・リーグ6球団，パシフィック・リーグ6球団に所属している。それぞれのチームはファーム・チームを有して育成を目的にして特に若手を指導している。選手登録は1軍，ファーム総勢で70名であり，1軍登録は28名である。スプリング・キャンプは2月1日から約1ヶ月行い，3月から開幕前までオープン戦を行い，調整してシーズンを迎えるのである。キャンプの内容は，大体4～5クールに分けられ，キャンプイン当初は体力作りから入り，その後徐々に実戦に移行していくのである。練習時間はかなり長く，ほとんどのチームは5～6時間練習している様である。アメリカのメジャーリーグは体力作りはキャンプ前に各自が行い，キャンプインの時には万全の体調で臨んでいる点に大きな違いがある。またオープン戦の考え方にも違いがあり，レギュラークラスはオープン戦の後半戦から出場するがメジャーの場合は初期の段階から出場し，調整するのである。キャンプの内容も基本の反復練習であるが，徐々に鍛え，3時間で終了し個人練習がメインである様に思われる。シーズンは4月にスタート，10月初旬に終了する。試合は140ゲームである。ポストシーズンは各リーグの優勝チームが日本シリーズを戦う。7回戦制である。

VI. 結　論

以上述べてきたとおり，日米の野球には数多くの相違点がある。それは日米文化の違い，国民性の違いともとれるが，ベースボールあるいは野球が発展してきた経緯の違いも大いに影響していると言える。アメリカのベースボールはあくまでもプロフェショナル・チームを中心に発展し，これに対して日本の野球はアマチュア・チーム（学生チーム）を中心に発展してきた。言い換えれば，アメリカに生まれたベースボールは，市民スポーツとして発展して行ったが，わが国へ移入され普及，定着して行く過程は学校教育の場であったということが根本的な相違の現れである。また，チームに対する選手の姿勢にしても，日本ではすべてチームが優先し，チームのために選手は自己犠牲を強いられる。一方アメリカではチームも大事にするが，お互いの個性をもっと大切にする。またプレーに対する姿勢においても違いがある。日本は努力すること，すなわち猛練習そのものが美徳であると考え，まず努力が名選手をつくり，努力がチームを勝たせると思いこんでいる点がある。アメリカでは練習は目的への手段であって，いい選手というのは生まれながらの素質によるところが大きいと考えられている。勿論努力は素質を高めるが，素質が第一だと考えている。要するに闇雲に練習しても意味がない，練習と素質の間のバランスをとる，このバランスこそが肝要であるという考えなのである。

最後に指摘したい点は，アメリカ人が考え出したベースボールを日本は日本人に合う様に変えていったという点である。つまり，外から取り入れたものを修正し日本的なものに変えてしまい，何事も日本に適応させていく能力こそ日本の力であると言える。しかるにベースボールというスポーツを同じルールのもとでやっているが日米両国の国民性にあったやり方でそれを行っていると言える。また一方ではここ数年の間，日米野球の交流がますます盛んになり，その距離は今まで以上に縮まり，その結果，野球の技術においてもスピード，パワーにおいても格差が縮まってきたことも事実である。しかしながら，現在，十数人のプロのトッププレーヤーが野球ではなくベースボールの真髄を求めて海を渡りプレーを続けていることも現実である。このことは，日本の野球が本来のベースボールから離れ，別の道を進みつつあると言えるのではないだろうか。日本野球界は，この現象を，真摯に受け止め一日も早く「野球道」から脱皮し，より広い視野に立ち，国際化に対応できる組織及び環境を整備することが急務であると思う。

〈参考文献〉

福島良一（1991）「大リーグ物語」講談社

カルロス・ガルシア著，鈴木美嶺訳（1980）「世界アマチュア野球史」PP. 21-22 ベースボール・マガジン社

広瀬健三（1965）「日本の野球史」国民体育振興会 PP. 12-38

池井優（1991）「野球と日本人」丸善ライブラリー

井上光貞（1971）「日本の歴史」21，22，23巻 中央公論社

伊東一雄，馬立勝（1991）「野球は言葉のスポーツ」中公新書

功力靖雄（1969）「明治野球史」PP. 9-12，37-39 逍遥書院

大坪正則（2002）「メジャー野球の経営学」集英社

佐山和夫（1997）「野球から見たアメリカ」丸善ライブラリー

ta 玉木正之，ロバート・ホワイティング（1993）「ベースボールと野球道」講談社

宇佐美陽（1997）「大リーグ野球発見」時事通信社

綿田博人（1989）「アメリカのカレッジベースボールの組織とその現状についての一考察」慶應義塾大学体育研究所紀要 Vol 29
「激動の昭和スポーツ史　高校野球編」（1989）上・下　ベースボール・マガジン社
「激動の昭和スポーツ史　社会人野球編」（1989）ベースボール・マガジン社
「激動の昭和スポーツ史　プロ野球編」（1989）上・下　ベースボール・マガジン社